

Comparative Study of Religiosity in African and Asian Modernized Societies

Epistemological perspectives

AMO Kae
KASHIO Naoki

Kyoto Seika University's Center for African and Asian Contemporary Culture Studies initiated a research project called "Religion, Modernity and Social Spaces in Asia and Africa" (2020-2023). How do religiosity and spirituality shape the way of life of individuals and groups in modernized African and Asian societies? This paper intends to examine the challenges and opportunities for future comparative research on religiosity in Africa and Asia from epistemological and methodological perspectives.

First, it discusses the relevance of studying religiosity in the post-modern era. It analyzes how colonial rule and modern states shaped the study of religion in Africa and Asia. It also discusses the need to compare religious change in a post-modern, multipolar society from a new perspective. We're giving special attention to the spiritual revival taking place in different African and Asian countries and how it's impacting society, daily life, and politics.

Next, we point out the need for an approach to everyday religious practices. Witchcraft, customs, and unnamed religious practices create different levels in people's cognitive space, impacting the organization of the community and the public political sphere. Through scrutinizing the overlapping conceptual axes; "corporeality/space", "money/things", "agents", and "discourses", we have reviewed the efforts of this study in attempting to depict contemporary aspects of religiosity in Africa and in Asia.

The paper finally addresses a sensitive epistemological question. Should researchers themselves be believers and practitioners if we view research as a form of translation of local religious knowledge into "scientific" terms? We discuss the necessity of reviewing our knowledge-seeking locations, such as Western universities and research institutions, to have a dialogue with other knowledge-rich places in Africa and Asia.

現代社会における宗教性に関する アフリカ・アジア比較研究の可能性

—認識論的視座の再検討—

阿毛香絵 AMO Kae
檜尾直樹 KASHIO Naoki

はじめに

2022年7月8日、安部元総理の銃殺事件ⁱを受けて、日本でも「宗教と政治」に対する関心が一気に高まった(島蘭, 2023)。近代化を経た、すなわち政治と宗教、理性と信条とが分け隔てされ、後者ではなく前者が公の社会を司っているという暗黙の了解のもとに暮らしている多くの市民は、「宗教」というワードの新たな浮上に不安を抱き、特に昭和世代の大人達は1995年の地下鉄サリン事件ⁱⁱを思い出したであろう。こうした文脈での「宗教」とは、「セクト」「カルト」などとして認識される一部の教団宗教、得て新宗教的団体を指す。こうした宗教＝「現代社会に脅威を与えるセクトとしての教団宗教」という解釈は日本に限ったものではなく、既に9・11ⁱⁱⁱで植え付けられたアラブ地域のテロ組織やイスラミズムに関する欧米の危機意識(Burgat, 2007)にも見られるように、近代社会の宗教に関する言説において比較的共有されたものであるといえる。20世紀以降の欧米を中心とした政治・社会思想がいき渡った近代の政治的文脈において「宗教」として認識される事象の多くが「セクト的な新宗教」に関するものであったことは特筆すべきである。

筆者の一人である阿毛が専門とする近現代のセネガル研究においては、20世紀以降現地で発展したイスラーム神秘主義(スーフィー)教団(tariqa)が落花生栽培を背景に政治、経済、社会そして文化すべての局面において多大な影響力を持つようになり、欧米の研究者たちの主要な研究対象となってきた(Marty, 1917; O'Brien, 1971; Copans 1980; Coulon 1981 他)。これは20世紀西洋の社会科学における宗教に関する関心が政治的経済的主体である「組織」としての宗教認識に拠っていたのと同時に、

植民地統治という当時のフランスにおける政治的課題が、教団研究の需要を創出していたからであるといえる。

20世紀後半、特に1970年代後半以降、宗教は別の形で社会科学の主要なテーマとして着目されだした。この時期は欧米の人文・社会科学の領域においてポスト近代あるいはポスト近代主義(post modernisme)という用語が汎用されるようになった時期である。特に社会科学におけるポスト近代とは、それまでの「実証主義科学と進歩のイデオロギー」(Darnell and Staszak, 2006, 875)すなわち欧米社会が想定していた「大きなものがたり」が敗退した世界を指す。植民地主義を裏付けていた進化論的な思想や、冷戦の背景にあった社会主義、マルクス主義などのイデオロギーが敗退した後の世界はどこへ向かうのか。同時期、多くのアフリカ・アジア地域では、近代国家としての独立後、旧植民地への従属関係によって成り立ってきた社会主義国家の限界が露骨となり、経済と政治の自由化に伴う経済・社会危機がおこった。植民地主義の終焉や冷戦の締結とともに一つの近代が「終わった」こと自体ははっきりとしつつ、その後の社会や世界を「方向づける」鍵が明確でない中、新たな動きとして、コミュニティや宗教の復活、「スピリチュアリティ文化」(檜尾, 2012)が各地で新たなムーブメントとして、注目されるようになった。

セネガルでも、先に挙げたイスラーム教団が、それまでの農村ベースの落花生栽培から都市経済へ参画し、一種の新宗教として社会の近代化に大きく貢献した(Copans 1980; 小川, 1998)。1990年代以降は教団の後継者である若いリーダー達が宗教政党や宗教メディアを立ち上げることで政治の表舞台に直接参画するようになる。(Xavier, 2004; Samson,

2005; Diouf, 2013 他)。政治の自由化の中で政党を立ち上げたり、比較的低い所得層の農村や地方出身の都市民を中心として支持を集めてきたという面では日本における戦後の創価学会と公明党の政界における活躍(中野, 2023)とも比較できるだろう。

新宗教としての教団が着目される一方で、すでに多くの研究が指摘したように、アフリカ・アジアにおいて、教団宗教という枠組みに回収され得ない、より広く多種多様な「宗教性」あるいは「宗教的なもの」も日々の暮らしの中に偏在してきた。例えば、呪術(Sow, 2013; 浜本, 2014; 梅屋, 2018; 片岡, 2020 他)、風水、土地の習慣、儀礼、シキタリなどである。人々がいかに日々の事象に関する説明の網を「見えざる領域」にはりめぐらしてきたか(浜本, 2014; 片岡, 2020)という論点は、アフリカ、アジアの現代社会の理解において非常に有用である。1970年代後半以降に顕著になった地域の宗教性やスピリチュアル文化の復興は、こうした多々の宗教性をすくいあげ、宮崎アニメやチャット占いなどに見られるように、一部でメディアや通信手段と結びつき商品化していった(堀江, 2019; 山中, 2020)。近年の日本において、「エモい」「尊い」などのキーワードと共に若者たちが新たに生きる拠り所とする「推し」の文化もまた、「ある対象を尊び、それを愛で祭ることによって日々の活力を得る」という点においては一種の現代的宗教性の事象(あらわれ)であるといえよう(阿毛, 2023)。

以上の例に垣間見られるように、現代社会には数多の「宗教的なもの」が満ち溢れており、人々の日常生活から公共空間、より組織化された国家の政治に至るまで、社会空間を形成する必要不可欠の要素としてダイナミズムを形成してきた。それはカサノヴァが1990年代に西洋社会を対象として描いた

ように「宗教が現在進行中の近代世界の構築において重要な公的役割を果たし続けている」とも解釈でき(カサノヴァ, 2021: 37)、セックが2000年代初頭にそれまでのセネガル社会を分析して指摘したように、宗教が「新たな近代性(nouvelle modernité)」を形作ってきた(Seck, 2010)と説明することもできる。

宗教性について多角的な側面から比較研究を行うことで、変化するアフリカ・アジアの社会をより良く、深く理解することができるのではないか。これが2020年に筆者らが『宗教性と現代社会空間』研究会を立ち上げるに至った初めの問題意識である。

本稿の射程

アジア・アフリカ比較共同研究『現代社会の生活空間における宗教性』は、京都精華大学の萌芽的研究助成を得て2020年から2023年まで同学のアフリカ・アジア現代文化センター(CAACCS)の研究プログラムとして共同研究を行った^{iv}。教団としての「宗教」概念ではとらえきれない精神性やライフスタイルを含む宗教性やスピリチュアリティ文化はアフリカ・アジアの現代社会において、どのように個人、集団の生き方を形成しているのか。こうした問いに対し、アフリカ・アジアの異なる事例の比較分析を目的としている。

学内外より共同研究者を集め、メンバーを増やしながら西アフリカにおいてはセネガル、マリ、コートジボワール、東アフリカのウガンダ、ケニア、アジア地域ではインドやネパール、イラン、インドネシア、そして日本や韓国、中国など、多様な地域を専門とする研究者が定期的に参加し、議論を重ねた(図1)。

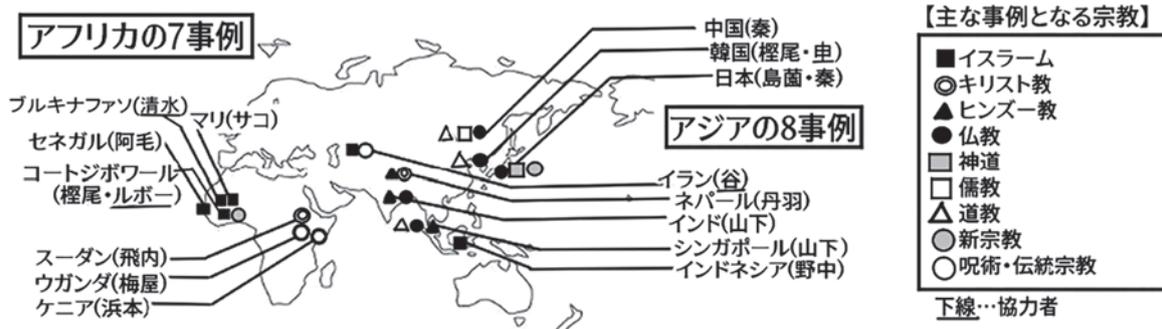


図1 本研究プログラムの研究地域

上記で挙げた多様な地域における事例研究は非常に多くの蓄積がある先行研究に基づいている。また、それぞれの研究対象も個々の地域的特色に加え、イスラームやキリスト教などの一神教や新宗教のようにある程度固定化された分野的、学術的枠組みを持っているものから、現地の呪術信仰のようにそれぞれの地域の日常に埋め込まれた信条や実践、あるいはより近年復興したスピリチュアル文化に至るまで多岐にわたり、認識論的枠組みやアプローチも大きく異なる。これらの事例を横断し新たな理論を構築するには、共通の研究軸や研究枠組みに加え、共有された方法論を用いた新たなフィールド調査に基づくより長期的な共同研究が必要とされるだろう。本研究会は3年間のコロナ下でフィールド調査が制限された中での実施であったため、海外でのフィールド調査の実施を断念せざるを得なかった。上記の理由により、既存の研究成果について再検討すると同時に、研究をとりまく現代的課題について共同で検証していくことに重点を置くこととなった。国内外の研究者との定期的な勉強会と国内のフィールド調査を通し、アフリカ・アジア現代社会における「宗教性」研究の現代的意義について理解すると同時に、共通の研究枠組みの構築へ向けたいくつかの手がかりと基礎となる視座について検討した。

本稿はこうした研究成果に基づき、アフリカ・アジアの宗教性に関する比較研究を行う上での課題と可能性について、認識論的な視座から論じることを目的としている。主に以下の3点について論じたい。

- (1) 宗教性研究の現代的意義：ポスト近代のアフリカ・アジアにおける宗教性研究の意義について再考する。
- (2) 日常的な生活空間における実践宗教に関するミクロな視点からの比較研究の可能性：(1)について主に近代国家との関係から論じるのに対し、より民衆レベルの「生活空間」における実践宗教についてミクロな視点から比較研究する意義と可能性を考える。
- (3) 「宗教性」という研究テーマに向かう研究者の認識論的立場の再検証：「宗教性」という対象に向かう研究者は一人ひとりが方法論や認識論的立場を違にしている。共同研究を豊かなものにするために、現地の研究者や研究機関などを含めた異なる人々とどのような共同研究の視座を構築していけるのか。

(1) ポスト近代のアフリカ・アジアにおける「宗教性」研究の意義

近代社会における宗教に関する研究成果は、それぞれの地域や文化圏といったある程度まとまりのある地域的枠組み、あるいはイスラーム、キリスト教といった研究分野として確立された個別の教団宗教の枠組みの内部で比較研究されることがあっても（例えば、インドネシアとモロッコの近代化するムスリム社会を人類学的手法により比較したGeertz, (1968)）、地域や分野を横断し、かつ宗教的枠組みを超えた比較研究は少なかった。しかし近代以降のアジア、アフリカを横断する問題意識と研究の傾向は、これらの地域を覆う同時代的な世界の動きによって常に影響されてきた。本稿の初めの論点は、こうした同時代性に基づく宗教研究の政治的側面について指摘することで、現代における宗教（性）研究の意義について明らかにすることにある。

植民地支配から国民国家形成の流れにおける宗教性研究の政治性

ポスト近代におけるアフリカ・アジアの宗教性比較をする最初の意義は、これらの地域の近代における西洋・欧米との関係性の中で一特に植民地支配とその後の国民国家形成という近代化プロセスにおいて一現地の宗教が果たしてきた役割を見直し、地域横断的な視点から検証することにある。

20世紀後半から21世紀のアフリカやアジアの社会・宗教的変容を見ると、現地の伝統宗教や欧米から布教されたキリスト教、それより数世紀前より影響力を持ってきたイスラームなど、異なる宗教的バリエーションが近代政治の発展やそれを取り巻く社会の近代化プロセスに大きな影響を与えてきた。それは植民地支配から独立へ、抑圧から解放へといった単純なものではなく、これらの地域と西洋との政治的・経済的・文化的関係性の複雑さを映す鏡であり、現地の主体による西洋や西洋文化、その思想や政治モデルに対する反発、拒絶、蜂起、同化や理想化、模倣、許容、再解釈や新たな反駁などが繰り返し起こることで練り上げられた独自のプラクティスの積み重ねによって形成されてきたといえる^v。それぞれの地域の主体となる人々もまた一枚板ではなく、西洋的な教育を受けたエリートや都市民、農民、異なる民族や社会階層が存在するが、公の歴史やナショナリズムの担い手となったのは往々に権力に近い人々であったことは共通している。こうしたアフ

リカ・アジアの近代化プロセスの中で現地の宗教性が近代国家の側、そして民衆の側の双方において果たした役割は計り知れない。

伝統宗教、一神教、新宗教等のバランスや役割はアフリカ・アジアの国や地域によって様々だが、例えばセネガル、マリ、ニジェールのようにフランスの植民地支配の数世紀前よりイスラームの教えが現地の伝統的な風習や信仰、コミュニティのありかたと結びついて広まっていた地域においては、イスラームの伝統的権威や信者たちと植民政策が互いに競合、対立しあいながら近代化の流れを形成してきたかが重要な論点となってきた。インド、ネパールなどヒンドゥー教をマジョリティとしながら本来は外来の宗教であるイスラームやキリスト教と一定のバランスをもって政治や経済を形成してきた地域では、アフリカ地域と同様に国民国家形成の過程でいかに現地のナショナリズムを形成するかという問いに、それぞれの宗教権威が大きく関与してきた(丹羽, 2021)。イギリスの植民地であったインドと植民地支配を受けなかったネパールにおけるナショナリズム形成プロセスの違い、そこで現地の宗教が果たす役割の違いもまた、西洋を視座に入れた歴史背景に基づいているといえる。

日本、韓国、中国など東アジアでは、儒教や風水など現地の風俗に根付いた宗教的伝統的価値は広く共有しながら、近代化、国家形成の過程で現地の教団宗教が重要な役割を果たした。しかし教団宗教の位置付けはそれぞれの国家で大きく異なる。天皇という宗教的シンボルを掲げ大日本帝国として、つまり国家神道がナショナリズムを主導する国として出発した日本(しかし敗戦後には天皇の役割を象徴的なものとして縮小し、立憲君主制に基づく民主主義を掲げるようになり多くの国民は「無宗教的」あるいは緩い「多宗教」である)、大統領を中心とした民主主義を基礎としながら近代化の過程で東学、親日仏教、プロテスタントなどの諸宗教がナショナリズムの形成に大きな影響を与えてきた韓国(申, 2000)、共産主義により宗教的なものを政治から排除しつつ、儒教を宗教としてではなく思想として自国の対外へむけたカルチュラル・ディプロマシーの前面に押し出すようになった中国(Liu, 2018)など、現地の宗教的権威と近代国家との関わりはそれぞれの国、時代によっても違い、また時代を追って変容している。ここでは一部の事例を限定的に取り上げることしかしていないが、アフリカ・アジアに広がる個々の事例を上記で述べた対西洋と近代化の背景

を主眼に比較することは、これらの地域の近代化モデルを相対化し理解することに繋がる。

同時に、これらの地域で広く共通するのが、西洋をモデルとした国民国家形成の過程で植民者側の都合によって、あるいは新たな国家のナショナリズム形成のために宗教研究の学術的重要性が保証されてきた点である。言い換えれば植民地支配や国民国家形成の過程で大きな政治的圧力が及んだからこそ、宗教的伝統に関する学術的蓄積がなされてきた(Tshitungu Kongolo, 2020)。20世紀のアフリカ地域におけるイスラーム研究や伝統宗教研究の多くが植民者である西洋の研究機関によって発展してきたことや、初めの人類学者たちが西洋政府に派遣された軍人であったこと(Amo, 2019)、帝国主義を掲げた日本が独自の他者認識のもとに被植民地圏であったアジアの文化や宗教、伝統を収集することで民俗学/民族学を構築してきただけでなく、「宗教民族学」が明確な政治的意図でもってイデオロギー形成に貢献したこと(鈴木, 2023)などには、植民者側の都合と学術的分野の生成との深い関わりがみられる。近代国家がその形成過程で自国の歴史とアイデンティティを構築するために国民という民族的神話を構成する資料を収集してきたことは多くの研究が明らかにしているとおりである。「魂を共にし」「歴史と未来を共にする」ことが近代国民国家への帰属意識に不可欠な要素であるなら(Renan, 1882)その根源にある民族的伝統や信条を明らかにすることも政治的目的へ向けた方向性を持っていた。アフリカ・アジアの近代化以降の社会と宗教との関連については歴史学、社会学、政治人類学など様々な分野から論じられているが(Glifford 1998; 小川 1998; Thompson, 2014; 中尾, 2020 他)、こうした伝統を作ってきた近代の時代的背景をより深く比較し検証していく必要があるだろう。

もう一点指摘すべきは、アフリカ・アジアの近代社会が手本としてきた国民国家における宗教概念自体が西洋的価値に基づくものである、ということである。すなわち上記の近代国家との関わりから政教分離、あるいはライシテ論争の文脈で論じられてきた宗教とは、キリスト教を想定した近代的宗教概念に基づきながらより一般的な宗教インスティテューションを表す語として理解される「Église (教会)」であり、主要な論点となったのはこのÉgliseと国家の分離であった(ゴージェ, 2010; 72)。近代国家の成立に伴って「宗教=広義のÉglise」は国家・経済・科学の領域とは切り離され衰退する、あるいは個人

の信条を中心に周辺化されると考えられた(カサノヴァ 2021; 63)。しかし、こうした宗教の衰退・周辺化説は、そもそも「宗教」概念の根本がキリスト教的世界観に基づく Église では必ずしもないアフリカやアジアの現状とは往々にしてかみ合わず、「ライシテ」という表現は輸入されたが現地では西洋で想定されているのとは違う使われ方で汎用されるに至っている(例えば Holder 2013, 清水による科研プログラム^{vi})。

本プログラムにおける研究会でもこうした問題点が指摘された。日本語における「宗教」が西洋の religion から訳出された近代日本語である(長沼, 2015)のに対し、イスラーム圏の「(アル)ディーン」は、元来「裁き」の含意があり、信者には広く「信仰心」の意味でも使用されている。仏教・ヒンドゥー教における「ダルマ」は、「宇宙の法や秩序」、義務や権利、法、行為、徳、「生命の正しき道」などを含意しており、それぞれ上記で述べた religion とは必ずしも意味が一致しない^{vii}。近代的政治空間において「(アル)ディーン」や「ダルマ」を規範とした言説が持ち出されなくなったかというむしろ逆である。

近代日本の神道においては神社神道、すなわち「宗教」の領域と皇室による「祭祀」の複合体が天皇崇拜の国体論と結びつきながら人々の日常へと普及していったこと(島藪, 2010; 長沼, 2015: 125)を振り返れば、国家的政治的権威そのものが本来神聖に紐づいて発した西洋の王政から民主主義国家への流れと比較できるかもしれない。しかし国家神道の領域はそれ自体が日本の神道の一つの側面でしかない。国家宗教や公的宗教の周辺には、より深く生活空間に偏在してきた日本の精神文化史の根底にある様々な神道の領域があり(島藪, 2022)、数多の「神未満」(片岡, 2021)の存在や自然信仰、霊的存在が満ちている。日本やアジア、(そしてアフリカ)の宗教空間、社会空間において、国家の宗教性を説明する言語と、民衆の生きてきた生活空間に根付いた宗教性を説明する言語は必ずしも一致してこなかった(内山, 2007)。本共同研究が日常の生活空間における実践宗教や「下からの」政治領域に着目する理由である。

最後に、こうした「宗教」という用語や現地における宗教認識の「ズレ」の問題と並行して、アフリカ・アジア各地の教団宗教そのものも、セネガルやマリの事例のようにパブリックな政治の場においてか、中国のように水面下においてかの差はありなが

ら政治的局面から撤退したことは無かった。そもそも西洋とアフリカやアジアにおける公共宗教の位置づけに生じる「ズレ」の一つの理由は、後者ではパブリックとプライベートの分かれ目が必ずしも明確になっていない点にある(Holder, 2013)。1980年代になると、それより前の世代—マルクス主義や共産主義を掲げながら植民地支配の構造を引きずってきた世代—の遺産から脱しようとする都市の若者たちの間で宗教運動が新たなダイナミズムを形成するようになり、これらの運動を宗教的公共空間の生成とする分析もある。しかし同時期のアフリカ・アジアの都市部には、農村出身の人々が流入し、ムラの血縁や地縁に基づく相互扶助の宗教コミュニティを再生産していた背景を忘れてはならない。パブリックな場において新たに意思決定を行うようになったのは「理性的合理的な意思決定を行う近代的個人」ではなく、たとえ彼らが都市で高等教育を受けたとしても「農村的な共同体意識に基づく一信者」であった可能性が高いのである。

こうした背景の中、1970年代後半から1980年代以降のアフリカ・アジアにおいて、西洋の近代国家モデルに基づいた国家が機能不全を起こし、現地の宗教性や教団宗教が「下からの」開発や経済発展を掲げ、資本主義経済や政治的領域に参入していくようになった。(Seck 2015; Dozon, Holder 2013; Soares, Villalón 2005) 新自由主義のあおりで構造調整が行われ、経済危機に陥ったアフリカ諸国では特にこうした動きが顕著であるが、アジアにおいても仏教やイスラームの教えに基づくモラルエコノミーの主体が福祉や新たな経済の動きを形成してきた(櫻井, 2004)。都市の若者世代を中心として、自由主義化する国際経済の動きに対し、一方で資本主義と競合し、もう一方でそれに対するアンチテーゼとしての共同体主義を掲げた宗教復興運動が広がる。こうした運動が、新たな宗教アイデンティティ探求や「より良い社会を求める」動きと結びつき(Fabienne, 2005; 野中 2015)、人々を束ねるセーフティネットや新たな教育の現場といった「下からの政治」の主体として発展したことで国家や政治体制にも大きな影響を与えた。

ここでは筆者らの調査等から挙げやすいいくつかの事例を例に論じたが、認識論的立場からアフリカ・アジアの宗教研究のもつ歴史的的政治性と現代的役割について再検証していくことで、これらの地域の近代化についてより大きな世界の動きの中に位置づけ比較理解していくことが可能となるだろう。



図2 国内外の動きと先行研究との関連

多極化の時代における宗教性の再復興とスピリチュアリティ文化

1980年から2000年代までの世界の動きにおける開発思想や自由主義経済は、それまでの冷戦時代の思想を引きずったまま欧米を中心とした「おおきな物語」を前提として進められてきた。グローバル化を肯定する言説もまた、欧米を中心に世界が繋がり、物質的豊かさが増大することで社会は量的・質的に良くなり、よりよい生き方ができるという近代の理想に基づいていた。しかしグローバル化が加速すると同時にこうした欧米中心主義的な発展モデルは破綻しはじめる。本研究が着目する近現代の第2のフェーズは、欧米を中心としたグローバル化からの脱却が一つの世界の動きとして浮上する2000年代以降である。図2は前章の1970～1980年代に続き、2000年代以降を含む世界や社会の動きと先行研究との関わりを大きくまとめたものである。2000年以降、新自由主義を中心とする地球規模の経済的統合は常に進行中であるが、同時に新たな民族主義や地域主義が現れるなど世界が多極化するようになった。こうした波に拍車をかけたのが、中国や南米、中東、アフリカの台頭、そして多地域に偏在するイスラームファンダメンタリズムやテロ組織であった。「反グローバリズムとしての宗教運動」は、ネオリベラリズムや西洋的な政治システムを世界的に強要してきたアメリカを敵として、グローバリズムに反感を持つ地域、人々を巻き込んだ(櫻井, 2004; 大塚, 2004)が、経済的・政治的に欧米に依存している中東の国々などでは国家的政治基盤を見つけることはできず、アメリカの主導する対テロ戦争によって次第に勢いを落としていった。

2019年以降は、新型コロナウイルス感染拡大により一時ではあっても新たに世界が分断される転機を迎え

た。さらに2022年に始まったウクライナ戦争、2023年のイスラエル・ガザ戦争によりこうした世界の地域主義化、分断が改めて加速化している。

新たなテクノロジーや技術進歩も、世界の分断、多極化を助長する面がある。マスメディア世代がある程度共通した情報を消費していたのに対し、デジタルネイティブ世代は、身体化された小さな子機やAIによってオンデマンド化された情報、自らに関連する情報のみにアクセスする。これは一見自由なようで、スマートフォンというデバイスを持っているだけでは初期のグローバル化世代が夢見たような「世界に繋がる」ことができないと同時に、既に与えられている環境や機会に応じて社会的・文化的格差はますます広がる可能性が高いことを表している。筆者が日本やアフリカの若者を対象に調査した結果、その多くが限られた数のアプリケーション、決まった領域の情報しか見ていないことが明らかになってきた(阿毛, 2023)。特に2000年以降加速する情報の多極化の波の中で、格差社会の浸透・若者世代の生活不安・「生きづらさ」が表出すると同時にジェンダー観、従来の家族観が多極化し、バーチャル空間を背景にした社会の再個人化が社会現象となっている(Sjö, and Moberg, 2020)。

近年の宗教性の再復興は、こうした多極化の時代における自己の在り方や現代社会における人間や人間社会のありかたに疑問を抱き解決策の糸口を霊的な説明や実践に求める動きのなかに位置づけられる。長谷の編集した事例研究の中には、「道徳」「ケア」「国民文化」「慈善団体」など異なる表現で語られているが、これらの地域に生成してきた宗教性や精神文化復興の現代的側面に関する事例研究が収録されている(長谷, 2015)。今日、高齢化社会における医療の現場、被災地のケアなどにおいても宗教の

役割が着目され、地域横断的な公共宗教に関する研究が発表されてきた(櫻井 2020, 葛西・板井 2013)。対して若い人口が増える東アフリカにおける福音派系のアソシエーション(飛内, 2022)や、西アフリカのイスラームにおけるスピリチュアル回帰の動き(Amo, 2019)、呪術復興の動き、あるいはアフリカ現地では必ずしも「宗教」として認識されていない日本の新宗教(真光、天理教)の都市部における浸透(Louveau 2012; Berthon, Kashio 2000)等も、こうした世界的な宗教回帰の一端を担っている。

これらの宗教性やスピリチュアリティに関する動きを比較すると、多くの共通点が指摘できる。信者らが自ら内面を見直し、「先の読めない」、「危険な」あるいは「敵意に満ちた」世界から自由になるために「生まれ変わる(renaissance, reborn)」という言葉が受け入れられてきた点(飛内, 2022)、近代化、西洋化による現代社会の問題や人間関係、健康上の問題等を霊的な状態が「穢れ」や「呪い」などによって侵されている状態と表現し、こうしたものから自由になるための「清め」を行う点(Louveau, 2012)等である。アフリカの事例においてはこうした動きは時に「アンチ・欧米(化)」という側面を強く持ち、現地の伝統文化や精神文化を前面に押し出す民族ナショナリズム的傾向を持つこともある。

スピリチュアリティ回帰の動きはアフリカ・アジアに限定されておらず、欧米でも、新宗教の活発化や福音派の政治的影響力の広まりを受けて、公共圏における宗教が可視化しており(Habermas, Taylor, Butler, West, 2005; Casanova, 1994)。一部の宗教運動はN G Oや慈善団体、社会運動、医療機関、教育機関など近代的な集団組織を再編成している。著者の樞尾はこうした様々なレベルのプラクティスについて分析し、「内面—外面」、「個人—集団」に向かう異なるアスペクトを説明したうえで定義したⁱⁱⁱ。

最後に、こうした動きの特徴として「より善い生き方」を模索するために、あるいは生そのものの意味を見直すために、一部の信者たちがある種の超越的な神秘体験を伴った瞑想法を实践することが指摘できる。瞑想法は、西アフリカのスーフィー教団のように神の名を繰り返して唱えることで、ある種の呼吸法や身体技法に基づきトランス状態に入るものや、より静的なアジアの呼吸法や座禅のように、風土や身体性に応じた異なる形態を持つ。しかし形態の相違はあれ、こうしたプラクティスを段階的に極めた人が究極的に到達しようとするのは「ノン・デュアリティ」(non duality)あるいは「自己否定」

(self-denial)と呼ばれる究極的なスピリチュアリティの帰着点(Kashio, 2021; 126)であり、スーフィズムの文脈ではファナー(自己の消滅・神との合一化)と呼ばれる状態である。

脱グローバル化、多極化が進行する現在、人と霊性文化との新たな関わりについて考えることは、人間社会の真の「ウェルビーイング」について再考し今後の社会の方向性を読み解くための一つの鍵となるかもしれない。こうした実践は、多くの異なる社会階層の信者の間で行われていると同時に、特に欧米主義的な経済発展やそれに伴う物質的豊かさの恩恵を受けたはずの都市の知識人や中産階級の人々や西洋教育を受けた人々がそれらを相対化し、「本来の」豊かさ、信者の言葉を借りるなら「魂の」豊かさを取り戻すために実践していることが特徴だからである(Louveau, 2012)。近代社会の幸福論の一つのモデルとなったマズローのピラミッド(Maslow, 1982)における基礎的欲求が満たされ、自己実現の頂点を目指す人々がその帰着点として瞑想論の文脈における「自己否定」を選んでいるのである。

(2) 日常的な生活空間における実践宗教に関する ミクロな視点からの比較研究の可能性

上記において、アフリカ・アジアにおける宗教性研究の意義について、近代の政治的文脈との関わり、また多極化の時代と霊性文化の復興、という2つの観点から論じた。ここでは日常レベルのミクロな宗教実践に着目することの重要性について、方法論的視座から本研究会が議論してきたことについて概観する。

「実践宗教」に関する文化人類学的研究

古典的な宗教学が思想を対象とするのに対し、文化人類学は人に着目し、フィールド調査を通して「人々」のいとなみを観察する。本研究は、思想や聖典などに関する先行研究も検証しつつ、特に人々のミクロレベルでの宗教実践に着目する。その理由として、アフリカやアジアの多くの地域において、文章による「聖典」が共有されていない末端の信者たちの日々の営みがいかに宗教的ダイナミズムを形成してきたかということが改めて着目されているということが指摘できる(池邊, 2023)。

近年、アフリカ・アジアの異なる地域が統合されたり独立していたりする過程において、日々の実践宗教が、様々な媒介実践を通してよりパブリック

な政治的決定や選挙行動に至るまで、主に都市を中心とした社会・政治の近代化に関わってきたことが指摘されてきた。近代化したアフリカ・アジアの社会では、日々の宗教実践が社会におけるあらゆる変化の原動力となり、ドメスティックな相互扶助の在りかたなど日々のマイクロな政治の局面 (Le politique) から、よりパブリックな政治の場 (la politique) (Gauchet, 2005) に至るまで、時に民主主義や国家を飼いならす「下からの」政治プラクティスを生成してきた。特に家庭などマイクロな領域における宗教観が、ジェンダー意識やモラルエコノミー、宗教 NGO など実践宗教の異なる局面を形作り社会や政治に影響を与えている様相が明らかにされている。

政治学的には西洋的な自由民主主義国家に分類される我が国や韓国においても、日常空間における実践宗教がどのように公的政治に至るまでの社会領域に影響を与えているかを調査し、アフリカの事例とも比較して研究する必要があるだろう。例として、日本とセネガルの事例について図式化した (図3)。公明党やセネガルの宗教政党がパブリックな政治の

場での活躍に至るまで、水面下に個々の信者による日々の礼拝やコミュニティにおける勉強会、師弟関係にもとづく個人的なやりとりなどの実践の積み重ねがある。身体性や日常空間に根差したこうした実践があるからこそ、それがより集団的行為である集団でのズィアラ (セネガルの教団における導師への挨拶まわり) や、慈善活動などの媒介実践を通じて言説や社会関係の束を形成し、最終的には選挙行動に代表されるようなパブリックな政治に影響を与えられよう。また、これらも一方向的な動きではなく、様々な動きが同時進行的に起こっており、フィールド調査に基づく調査により今後異なる実践とその役割について調査する必要があるだろう。

こうした日々の実践宗教の表出するテーマについて①身体性と空間、②貨幣ともの、③エージェント④ディスクールなどのいくつかの鍵となる概念を用い、それぞれの事例を比較する試みを進めている (図4)。成果については今後発表していく予定だが、イスラーム圏における礼拝やアジアの寺におけ

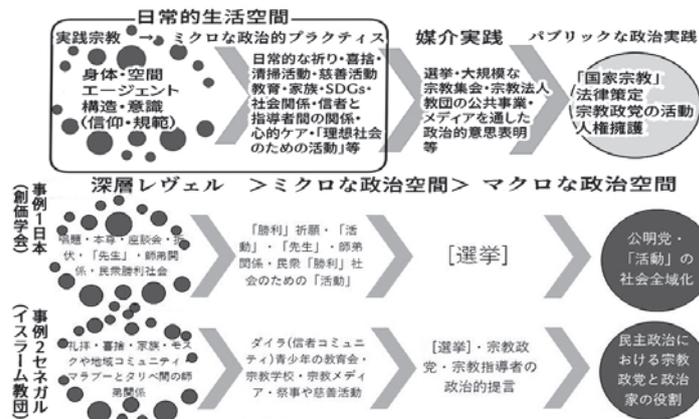


図3 実践宗教から政治活動まで (日本・セネガル)

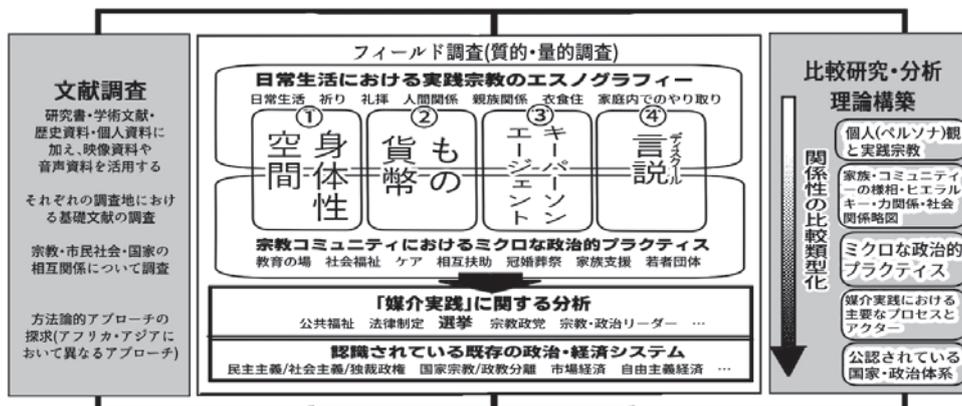


図4 比較研究の枠組み

る読経や清掃などの実践、西アフリカで「マラブー」と呼ばれる導師のありかたと日本の創価学会の「先生」、あるいはタイの開発僧との類似点、異なる宗教儀礼の場でこうした指導者や信者に発する言説空間における現代の社会課題の可視化など、テーマごとに比較の視点を通しアフリカ・アジアにおける比較を進める。

アフリカ・アジアの日常と呪術的信仰

上記の実践宗教による「下からの政治」の現場は、宗教性や政治性が露出する祭りや選挙運動などの場面はもちろん、日常生活の何気ない行動や身体性—例えば街角で祠の前を通った人が手を合わせる、といったような—にこそ、本来のダイナミズムが見いだせると筆者らは考える。本研究では、日々の何気ない儀礼やしきたりにも関心を持ち研究を進めている。東アフリカ地域を専門とする浜本、梅谷はそれぞれの地域における伝統宗教や呪術と人間社会との関わりについて分析することで、現地の価値観や呪術信仰に裏付けられた意思決定のありようについて分析した(浜本, 2014; 梅屋, 2018)。近代化したはずの生活空間には、呪いや呪術を説明するための「物語の網」が埋め込まれており、人々の社会生活や日常生活を形成しているだけでなく、コミュニティ内でのできごとを説明する思考や世界観そのものを司る重要な役割を果たしている(片岡, 2011)。

現代日本やその他アジアの地域でも、人々はお守りや護符を持ち歩き、人が亡くなるとそれぞれの風習に応じたタブーやシキタリに応じて、「マツル」「オクル」ための数限りないプラクティスが存在する(宮本, 2017)。時にはうまく「オクリ」損ねた代償として「ノロワレタ」、「タタラレタ」などというおまけもついてくる(堤, 2020)。空間的にみても、近代化したはずの街の路地の片隅には封印された「鬼門」が多々あり、精霊が住まう木や、地の神様が祭られた祠、霊媒師、呪術師など多々の呪術信仰が生きている(竹内, 宇都宮 2010)。新宿のビル群の一角やエレベーターの中にさえ、精霊や「タタリ」の言説は甦る。

こうした諸々の事例を通して筆者らが明らかにしていきたいのは、アフリカ・アジアの現代社会を生きる人々の日常空間や社会空間、ひいては政治空間が、いかに宗教性に基づいて配置されてきたか、という点である^{ix}。日々の実践宗教のありかたについて、人類学的手法を用いて丁寧に検証しつつ、それを異なる地域間で連なった現象として比較研究する

ことで、公的政治の言説では拾いきれない現代社会の根底にある宗教性のダイナミズムをより深く描く試みができるだろう。

(3) 「信するか否か」を超えた認識論的対話の場へ

最後に度々議論となったもう一つの論点について記載しておきたい。それは研究者本人の認識論的立場に関するものである。「宗教を真剣に扱う」為にはどうしたよいか、という問いを宗教や宗教的事象に向き合う研究者達は常に自らに問いかけてきた(片岡, 2019)。本共同研究に分担者あるいは協力者として参加している研究者の立場はそれぞれ異なるが、大きくは自らが信者あるいは実践者として宗教的プラクティスや瞑想実践などを行いつつ経験に基づく身体性や精神面の在り方を含めた実証的な記述を進めていく立場と、「方法論的無神論」の立場で信者という対象との距離をとったうえで「人々の文化を内側から理解する」、すなわち人々の説明する事象を現地のロジックで理解する試みを行う立場(片岡, 2019)とに分かれる。前者はその「客観性」や「科学性」が一部の研究者から疑問視されることで「非科学的」「学界の成果としてふさわしくない」というレッテルをはられる危険性と常に戦い、後者は、信者たちの領域に半身、あるいは全身で入り込みつつ、西洋的合理主義を超えた霊的領域の実態は永久に理解できないだろう、という当事者(信者)たちからの批判と向きあうこととなる。ここではこうした二元論的闘争に陥ることを避け、両者の在り方を理解したうえで認識論的対話の可能性の可能性について考えたい。

前者の立場をとる檜尾は、2022年の勉強会で沖縄における自らの調査に基づくオートエスノグラフィ・オートレリジオグラフィを通して、不可視的空間としての神霊空間を考察した(檜尾, 2022)。またこれまでも日本の霊性文化や瞑想法について数々の研究成果を発表していると同時に実践者として瞑想法の指導や、実践的なマインドフルネスに関する著作にも携わっている(檜尾, 2016)。霊性文化の領域を考察する際、個人の宗教体験に関する記述の重要性—それが学者本人のものであるか否かはおいて—は、文化人類学の分野や精神医学、哲学の分野でも指摘されている。人類学的研究を、「現場の言葉」から「科学の言葉」への翻訳作業の一形態であるとしてとらえたとき(現実的にはそれが不可能に近い翻訳作業であったとしても)(真島, 2005)、

西洋的「知」の現場における共通言語^aと、宗教的「知」の場における言語を両方習得した実践者兼研究者である、ということは、これら二つの言語の間を、少なくともどちらかのみしか習得していない者より、容易に行き来できるということになる。

この宗教的「知」の領域における言語習得に、はたして信仰心が必要であるか否かが大きな問いとなるが、実際はその答えはその研究対象となる宗教実践によると筆者らは考える。それが現地の人々との価値の共有によって会得できる呪術信仰や儀礼的慣習の場合は、人々の「ゲーム」に入ることのみならずも現地の人々の認識そのままに理解することができれば、信仰心そのものは必要としないかもしれない(片岡, 2019)。しかし、対象となる宗教的知識とそこでの共通言語の習得そのものが、段階的な身体的、霊的な鍛錬や修練を通した内的経験を通じてしかなされない場合、やはり信奉者・実践者であることが必要となってくるのではないか。これは一度も大学で学んだことがなかった人に学術的言語で論文を書くのが困難なのと同様である。だれでもその分野の習得に向かえるか、いうなれば誰でもその大学に入ることができるかという「この大学(Tariqa, スーフイー教団)に入るには、信仰心を持つことが大前提である」という現場も存在する^m。こうした領域にいかに入り込み理解を試みるか、またそれができるかは、信仰心を持つか否かを含め「翻訳者」としての研究者本人の努力と技量にかかってくるだろう。また、ひとりの人としての研究者が自らのライフワークとして宗教性や信者とかわるうえで、対象や自身の信仰心について刻々と変化させていく可能性があることも否定してはならない。いずれにしても、認識論の問題はそのまま存在論へと移行するのである。

最後に、信仰と学術的实践という課題を考える際に、本稿を含めた宗教性研究のアウトプットの「場」について今一度吟味する必要がある。言い換えれば「研究というある種の翻訳作業が誰に向けられたものか」という問いである。そもそも西洋におけるアフリカ・アジアに関する宗教研究の現場では、研究者自らが信者や実践者であることを公言して研究を遂行することは前提とされてこなかった。なぜならそれを遂行する研究機関や大学機関自体が「科学的合理性」に基づく「客観的な説明」が知識と呼ぶに値するという大前提にのっとって発展を遂げてきた西洋近代の産物だからである。それに加えてアフリカやアジア地域の宗教に関する研究の多くが、植民

地政策を背景とした支配者側の都合による政治的有用性(植民地支配)に基づいて予算配分されていた。言い換えれば、対象地域の多々の「みえない領域(宗教性)」に関する事象を、西洋的理性や知性で理解できる「見えるもの=科学的な言語」に「翻訳」し、植民地政策や国家政策に有用になるように「意味づけ」をすることそのものが人類学者や民俗学者の最も重要なミッションであった。オリエンタリズム的な他者へのあこがれというアスペクトを抜きにすれば、こうした極めて利害関係に基づいた政治的意図により欧米や日本の東方研究や宗教研究の多くが成り立ってきたことは第一章で指摘したとおりである。

万が一個人としての研究者が現地の宗教を信奉することになったとしても—イスラーム圏に長くいた研究者に多くあることだが—、研究の過程で生まれた信仰はあくまで個人的主観的信条であり、科学的な議論の場に持ち出すことは場違いであった。キリスト教系の団体や布教者を除き、今まで欧米の研究機関や学術機関の地域研究として目に触れる研究成果の多くは、それが報告書的なものであっても、あるいは現地の「空気を伝える」民俗学的記述であったとしても、「見える=合理的に理解できる」事象の分析を中心とした。

しかし今、こうした「知」のありかたそのものを近代西洋における歴史的産物として相対化し、アフリカやアジアの霊性文化の現場から異なる見地を取り入れた議論の場を創造することが検討されている。それは、例えば信者の言語で「神」と表現されているものについて、現地の言語を用いて理解すると同時に、それを科学的言語における解釈を含め、当事者である実践者たちと語りあい、共同で新たな翻訳言語を見つけていく試みである。そこでは必ずしもすべての参加者が「信ずる」必要はない。しかし「信ずる」、「実践する」ことによって見える領域について共同で定義していくうえで、宗教の信奉者あるいは実践者本人が学者として、あるいは協力者として「共に」今後の科学的領域に挑戦する試みを行うことが必要であろう。認識論的枠組みの再構築においても、近代の実証主義が衰退しつつある今の「科学」領域の新たな地平を検討していくうえでも、こうした共同作業は重要なものであるといえる。

また、現在科学的な言語そのものが不可視的空間を説明する新たな言語を再発見／発明してきていることも指摘されている。ウェブ空間や電波空間、物理・生体的エネルギーなどの言語は、宗教性・霊性

を説明する言語空間と限りなく似通った領域を指す言語群を形成しつつある。ユビキタス—我々は単一の自己ではなく、ありとあらゆるものに分身があるといったキリスト教神学由来の観念—、または科学的合理性の延長にある脳科学やシンギュラリティ以後の議論が、宗教性の培ってきた「神」や精霊の領域に関する言語と交差し翻訳されるとき、現代の宗教研究の地平はどこを捉え、どのような知を創造する場となりうるのだろうか。檜尾は、瞑想などスピリチュアリティを醸成する諸身体実践そのものが、現代社会においてプライベートからパブリックへの跳躍の契機を提供することを指摘している。ポストモダンをも含みこんだモダン空間におけるスピリチュアリティに関する変容の中心にあるのは、「世界が一つであることの自明性に関する具象化である」(檜尾, 2023)。現代ではグローバル化のひとつの帰結として、ウェブ空間の成立やAIの進歩によってこうした具象化が実現しつつある。モダニティの帰着地点、あるいは「ポストモダン・脱近代的な生き方」としてのスピリチュアリティをどのように解釈し実践するか。これは近代化以降の社会の大きな問いである世界の今後の方向性を位置づけ、理解することに繋がるだろう。

こうした議論は、筆者らが研究対象とする宗教団体や宗教研究機関の中で盛んに行われている。阿毛が初めて自らこうした場に居合わせたのは、2012年にダカールのティジャーニア教団の一派が主催した勉強会において、西洋哲学を広く参照しつつ「神秘主義における時間と空間」というテーマについて説明するスレイマン・バシル・ディアヌの講演を聞いたときである(Amo, 2019)。同氏はセネガル人哲学者であり、コロンビア大学で教鞭をとっている。主催者は現地の教団の幹部たちであり、講演はウォロフ語で行われ、かつ通訳者たちによってアラビア語やフランス語に同時通訳されていた。またオンラインで国内外の信者たちが視聴し、質疑応答では異なる地域から質問がオンタイムで投稿されていた。10年たった本年(2023年)にもう一つの調査地であるムリッド教団の聖地であるトゥーバを訪れた際は、信者たちによって運営される教団の総合大学が2つできており、そのうちの新たに作られた教育組織、シェーク・アーマド・カディーム複合教育センター(CCAK)では、かつて国公立大学や海外の研究機関で教えていた教員たちが教鞭をとる姿があった。現在セネガルに多数存在する宗派や教団の宗教会議やワークショップなどは、宗教法人が運営する

テレビ局を通しYoutubeやインスタライブなどを利用した配信をしており、オンタイムで視聴が可能になっている(2023年)。

先の質問—「この研究の翻訳作業が誰に向けられたものか」という問い—の答えについて、アフリカ・アジア地域を中心として現在作られている上記のような宗教的「知」の探求の場においても開かれた議論の機会が訪れている。

おわりに

本稿では3年に渡る勉強会のなかで議論された内容の一部について、特にアフリカやアジア、ひいては欧米を巻き込んだ現代社会の宗教性を研究する意義について論じた。

初めにアフリカ・アジアにおける宗教研究が、植民地支配から近代国家形成の過程において、いかに政治的意図を反映して発展してきたかについて批判的に検証した上で、ポスト近代以降の多極化する社会のなかで偏在化する宗教性について新たな知見から比較研究する必要性について論じた。

次にこうした共同研究をしていくうえで、日常的な生活空間における実践宗教に対し、ミクロな視点に発する比較研究の必要性について指摘した。呪術や風習、日々の名もなき宗教実践が人々の認識空間やコミュニティのありかたひいてはよりパブリックな政治空間に至るまで様々なグラデーションに満ちた実践宗教の在り方を作っている。身体性・空間、貨幣・もの、キーパーソン、言説といった共通の概念軸を想定することで、異なる地域を横断する宗教性の現代的諸相を描き出す試みについて紹介した。

最後に、研究者とそれを取り巻く「知」の生成の場における認識論的立場の在り方について議論した。研究活動を一種の翻訳活動と考えたとき、果たして研究者本人が「洗礼を受けた者(initi  )」、言い換えれば信仰者や実践者でなくてはならないか、という問いについて改めて検証すると同時に研究のアウトプットの場である近代西洋の構築してきた大学や研究機関といった「知」の探究の場そのものありかたを相対化すべきであるという点を指摘した。アフリカ・アジア地域で新たに作られている宗教的「知」の探求の場において、どのような議論や共同研究が可能か。こうした問いの持つ可能性についても今後共同研究を通して新たに開拓していく必要があるだろうⁱⁱⁱ。

註

ⁱ 2023年7月7日 安倍元総理大臣が奈良市で演説中に銃撃された事件。容疑者が「世界平和統一家庭連合」、旧統一教会に恨みをもっており、安倍元総理が同組織を支持していたことから攻撃したとの供述をしたことから、宗教と政治との関わりが注目されるようになった。

ⁱⁱ 地下鉄サリン事件 地下鉄駅構内毒物使用多数殺人事件。1995年3月20日に東京都で発生した同時多発テロ事件。宗教団体のオウム真理教の信者らにより神経ガスのサリンが散布され乗客及び職員、被害者の救助にあたった人々など死者を含む多数の被害者が出た。

ⁱⁱⁱ 2001年9月11日に起きたアメリカ同時多発テロ事件、通称9.11事件 (September 11 attacks) は、イスラム過激派テロ組織アルカイダによって行われたアメリカ合衆国における4つのテロ攻撃であり、日本人24人を含む2,977人が死亡、25,000人以上が負傷した。この事件がアルカイダの首謀者であるウサーマ・ビン・ラーディンの殺害成功(2011年)に至る10年の欧米による反テロ戦争のきっかけとなる。

^{iv} 2023年以降は、関連する二つの科研プログラムとして、それぞれ活動を続けている。『アフリカ・アジアの実践宗教による「下から」の政治プラクティスに関する人類学的研究』(2023-2026)

基盤研究(B)『アフリカ・アジアのデジタルネイティブ世代における宗教性と市民社会』(2022 - 2025) 国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B))

^v 例えばフランス領アフリカにおいては、「同化(Assimilation)と協力(Association)」に基づく政策が、一方で「文明化された(Civilisés)」とされる人々、もう一方で「現地人(indigènes)」に対してとられてきた。一部の都市では、現地の人々にフランス市民権が与えられていたため、西洋支配に対する反発と同時にあこがれや自らのアイデンティティとして同化するといった多様かつ複雑な態度を生み出した。(Dozon, 2003)

^{vi} 清水貴夫代表の基盤研究B「現代西アフリカにおけるライシテと宗教性の連続性の文化人類学的研究」研究期間(年度)2021-2025

^{vii} The Columbia Encyclopedia, 6th Ed., Columbia University Press, Gale, 2013

^{viii} 檜尾はスピリチュアリティを以下のように定義している。「『スピリチュアリティ』とは、固有の身体実践や社会的行為によって形成される自己超越意識(通常意識を超えた魂・霊的次元の諸意識段階で、自己が否定され、絶対的存在となんらかの形で絵一致した場所的個としての意識)であり、その意識に対応した、生死の意味(生きがい)やホリスティックな世界観、共生的社会(環境)として段階

アスペクト的に体験・表出されるものである」(檜尾, 2012; 27)

^{ix} 実践宗教における日々の営みには、それが実践されるプライベート、パブリック、あるいは半パブリックな日常的な社会空間という側面がある。サコは、現代社会と人々の生活様式、伝統的な価値観との関わりに注目し、アジア、アフリカ双方の事例に関して比較空間学、建築学、都市人類学の見地から総合的な研究を行ってきた。参照: ウスビ・サコによる本学の講義『コミュニティと社会』。

^x 本稿では筆者らの専門分野による限界もあり、アフリカ・アジアに集中したため割愛したが、スピリチュアリティと科学との関わりについては西洋の哲学や人文科学の分野でも大いに議論されてきた。本研究は西洋や西洋社会における宗教研究に関して完全なる物証主義的であるとか、霊性文化を理解できないものであるとして切り捨てるものでは決してない。今後、例えばベルクソンやバタイユ、その他の西洋の近代思想研究の専門家との対話や研究成果の批判的検証を行っていくことで、本研究で提示したアフリカ・アジアに発する研究の視点がより豊かなものになるだろうことを付け加えたい。

^{xi} ティジャーニア教団信者の証言, インタビュー, 阿毛2012年, サンルイ, セネガル。

^{xii} 本研究の一環として日本における若いムスリムたちや映像作家との映像制作や展示活動による実践研究も行ってきた。若者たちと研究者・芸術家を含めた複数の「(社会的)言語」を持つ人々との共同作業は新たな宗教性研究の地平と可能性について考えるきっかけを与えてくれた。参照「ヤングムスリムの窓」 <https://project-yme.net/> (最終閲覧日2023, 9, 27)

参考文献

Amo, Kae *Les dynamiques de l'islam dans les lieux de l'enseignement supérieur au Sénégal* Thèse de Doctorat, Paris, EHESS, 2019.

Asad, Talal. *Formations of the Secular: Christianity, Islam, Modernity*; Stanford, Calif: Stanford University Press, 2003.

Audrain, Xavier. « Du « ndigël » avorté » au Parti de la vérité. Évolution du rapport religion/politique à travers le parcours de Cheikh Modou Kara (1999-2004) ». *Politique africaine* 96, n° 4 (2004): 99-118.

Bayart, Jean-Francois. *Religion et modernité politique en Afrique noire : Dieu pour tous et chacun pour soi*, Paris, Karthala, 1993.

Berthon, Jean-Pierre, et Naoki Kashio. « Les Nouvelles voies spirituelles au Japon: état des lieux et

- mutations de la religiosité ». *Archives de sciences sociales des religions* 45, n° 109 (2000): 67-85.
- Beyer, Peter Friedrich. *Religion and Globalization. Theory, Culture & Society*. London Thousand Oaks (Calif.) New Delhi: Sage publ, 1994.
- Burgat, François. *L'islamisme en face*, Éditions La Découverte, Paris, 2007.
- Butler, Judith, Jürgen Habermas, Charles Taylor, Cornel West, Craig Calhoun. *The Power of Religion in the Public Sphere*. Columbia University Press, 2011.
- Casanova, José. *Public Religions in the Modern World*. Chicago, IL: University of Chicago Press, 1994.
- Copans, Jean. *Les Marabouts de l'arachide : la confrérie mouride et les paysans du Sénégal*. le Sycomore, 1980.
- Coulon, Christian. *Le marabout et le prince : islam et pouvoir au Sénégal*. Bibliothèque 11. A. Pedone, 1981.
- Cruise O'Brien, Donal B. *The Mourides of Senegal : The Political and Economic Organization of an Islamic Brotherhood*. Oxford Studies in African Affairs. Oxford: Clarendon press, 1971.
- Darnell, R., & Staszak, J.-F. « Postmodernisme et sciences humaines ». in Mesure S. & Savidan P. (dir.), *Dictionnaire des sciences humaines*. Paris: Presses Universitaires de France, 2006, 875-879.
- Diouf, Mamadou, éd. *Tolerance, Democracy, and Sufis in Senegal*. Religion, Culture, and Public Life. New York: Columbia University Press, 2013.
- Dozon, Jean-Pierre. *Frères et sujets : la France et l'Afrique en perspective*. Paris: Flammarion, 2003.
- Gauchet, Marcel. *La condition politique*. 1 vol. Collection Tel 337. Paris: Gallimard, 2005.
- Geertz, Clifford. *Islam Observed: Religious Development in Morocco and Indonesia*. New Haven London: Yale University press, 1968.
- Gifford, Paul. *African Christianity: Its Public Role*. Bloomington: Indiana University Press, 1998.
- Holder, Gilles, éd. *L'Afrique des laïcités : État, religion et pouvoirs au sud du Sahara*. Paris, Éditions Tombouctou IRD, 2013.
- Kashio, Naoki, Carl Becker. *Spirituality As a Way: The Wisdom of Japan*. Trans Pacific Pr, 2021.
- Kongolo, Antoine Tshitungu « De la bibliothèque coloniale à la bibliothèque africaine : nouvelles considérations ». *Présence Africaine* 201, n° 1 (2020): 59-87.
- Le Blanc, Marie Nathalie, et Louis Audet Gosselin, éd. *Faith and Charity: Religion and Humanitarian Assistance in West Africa*. 1 vol. Anthropology, Culture and Society. London: Pluto Press, 2016.
- Les politiques de l'islam en Afrique : mémoires, réveils et populismes islamiques*. 1 vol. Hommes et sociétés. Paris, Karthala, 2018.
- Louveau, Frédérique. *Un prophétisme japonais en Afrique de l'Ouest : anthropologie religieuse de Sukyo Mahikari, Bénin, Côte d'Ivoire, Sénégal, France*. Paris, Karthala, 2012.
- Marty, Paul. *Études sur l'Islam au Sénégal*. 2 vol. Collection de la Revue du monde musulman. Paris: E. Leroux, 1917.
- Maslow, Abraham Harold. *Toward a Psychology of Being*. 2nd ed. New York: Van Nostrand Reinhold, 1982.
- Monteil, Vincent-Mansour. *L'Islam noir*. Paris, Seuil, 1964.
- Roy, Olivier. *L'échec de l'Islam politique*. Collection Esprit. Paris: Ed. du Seuil, 1992.
- Samson, Fabienne. *Les marabouts de l'islam politique : le Dahiratoul Moustarchidina wal Moustarchidaty, un mouvement néo-confrérique sénégalais*, Paris, Karthala, 2005.
- Seck, Abdourahmane. *La question musulmane au Sénégal : essai d'anthropologie d'une nouvelle modernité*, Paris, Karthala, 2010.
- Sjö, Marcus and Moberg, Sofia, éd. *Digital Media, Young Adults and Religion: An International Perspective*. London: Routledge, 2020.
- Soares, Benjamin F. *Islam and the Prayer Economy : History and Authority in a Malian Town*. 1 vol. International African Library 32. Edinburgh: Edinburgh university press, 2005.
- Sow, Ibrahima. *Le maraboutage au Sénégal*. Dakar, IFAN Ch. A. Diop, 2013.
- Thompson John M. *Sacred matters, stately concerns : faith and politics in Asia, past and present*. Peter Lang, 2014.
- Villalón, Leonardo Alfonso. *Islamic Society and State Power in Senegal : Disciples and Citizens in Fatick*. African Studies Series 80. Cambridge: Cambridge university press, 1995.
- Xin, Liu. *China's Cultural Diplomacy: A Great Leap Outward with Chinese Characteristics? Multiple Comparative Case Studies of the Confucius Institutes*, Routledge, 2010.
- 阿毛香絵「デジタルネイティブ世代の宗教性とソーシャビリテイ : 変化するセネガル社会を鏡として」口頭発表,

- 日本アフリカ学会第60回学術大会公開シンポジウム
2023, 5,14.
- 池邊智基『セネガルの宗教運動バイファル—神のために働く
ムスリムの民族誌』明石書店, 2023.
- 内山 節『日本人はなぜキツネにだまされなくなったの
か』講談社現代新書, 2007.
- 梅屋潔『福音を説くウィッチ：ウガンダ・パドラにおける
「災因論」の民族誌』風響社, 2018.
- 小川了『可能性としての国家誌—現代アフリカ国家の人と
宗教』世界思想社, 1998.
- 葛西賢太, 板井正斉『ケアとしての宗教』明石書店, 2013.
- 榎尾直樹『文化と霊性』慶應義塾大学出版会, 2012.
- 榎尾直樹『慶応大学マインドフルネス教室へようこそ』国
書刊行会, 2016.
- 榎尾直樹(口頭発表)「研究進捗報告：榎尾直樹「沖縄の霊
性風土—宗教学方法論の再検討のために」現代社会の
生活空間における宗教性(ReSM) 公開勉強会,
2022,2,26.
- 榎尾直樹(口頭発表)「現代生活空間における宗教性の一理
解—スピリチュアリティを鍵概念として—」萌芽的研
究助成 公開ワークショップアジア・アフリカ比較共
同研究「現代社会の生活空間における宗教性」(最終勉
強会)2023,2,12.
- ホセ・カサノヴァ『近代世界の公共宗教』筑摩書房, 2021.
- 片岡樹「何をしたら宗教を『真剣にとりあげた』ことにな
るのか?—調律と複ゲームのフィールドワーク論—」
杉島敬志『コミュニケーション的存在論の人類学』臨
川書店2019, 48-83.
- 片岡樹「すべてははじめからわかっていた 東南アジアタ
イリック山地民ラフの呪術と動物」川田, 白川, 飯田
『現代世界の呪術：文化人類学的探究』春風社, 2020.
- 片岡樹「神様未満? 愛媛県菊間町の牛尾にからみた神と妖
怪」『文化人類学』85巻4号, 2021, 623-639.
- 櫻井義秀『アジアの公共宗教：ポスト社会主義国家の政教
関係』北海道大学出版会, 2020.
- 櫻井義秀『宗教と社会開発：東北タイの開発僧』印度哲学
仏教学 19, 2004, 245-75.
- 櫻井義秀, 濱田陽『アジアの宗教とソーシャル・キャピタ
ル』明石書店, 2012.
- 島蘭進『国家神道と日本人』岩波新書, 2010.
- 島蘭進『教養としての神道：生きのびる神々』東洋経済新
報社, 2022.
- 島蘭進(編)『政治と宗教』岩波新書, 2023.
- 鈴木正崇「宗教民族学と総力戦体制」『宗教研究』日本宗教
学会 97, no.2, 2023: 387-412.
- 飛内 悠子「アフリカにおけるキリスト教信仰覚醒につい
ての研究序説：南スーダンにおけるインタビューから」
『アフリカ研究』120号, 2022,13-18.
- 申昌浩『韓国的ナショナリズム形成における宗教と政治：
東学・親日仏教・改新教(プロテスタントの分析を通
じて)』博士論文, 総合研究大学院大学, 2000.
- 浜本 満『信念の呪縛—ケニア海岸地方ドゥルマ社会にお
ける妖術の民族誌』九州大学出版会, 2014.
- 堀江宗正『ポップ・スピリチュアリティ—メディア化され
た宗教性』岩波書店, 2019.
- 竹内郁郎, 宇都宮京子他『呪術意識と現代社会：東京都
二十三区民調査の社会学的分析』青弓社, 2010.
- 堤邦彦『日本幽霊画紀行：死者図像の物語と民俗』三弥井
書店, 2020.
- 野中 葉『インドネシアのムスリムファッション—なぜイ
スラームの女性たちのヴェールはカラフルになったの
か』福村出版, 2015.
- 長谷千代子 他(編著)『宗教性的人类学：近代の果てに、人
は何を願うのか』法蔵館, 2021.
- 中尾 世治『西アフリカ内陸の近代—国家をもたない社会
と国家の歴史人類学』風響社, 2020.
- 中野毅「自公連立政権と創価学会」島蘭進(編)『政治と宗
教』岩波新書, 2023.
- 長沼美香子『文部省『百科全書』における「宗教」言語情
報科学 13, 2015, 121-28.
- 真島一郎『だれが世界を翻訳するのか—アジア・アフリカ
の未来から』人文書院, 2005.
- マルセル・ゴーシェ『民主主義と宗教』トランスビュー,
2020.
- 山中弘『現代宗教とスピリチュアル・マーケット』弘文堂,
2020.